

## 一八五〇年和譯の馬太傳

春日，政治

<https://doi.org/10.15017/2332988>

---

出版情報：文學研究. 36, pp.45-69, 1948-03-30. 九州文學會  
バージョン：  
権利関係：

# 一八五〇年和譯の馬太傳

春 日 政 治

はしがき——基督教のことに極めて暗いものが、かうした題を捉へることの不遜さは勿論、必ずや言ふ所の徹し得ない節、稚い誤を冒す點の多からうことを自ら危むものであるが、たゞ繙譯文學に對する語學的考察といふ觀方に於て、かねてからの種の資料には、多少の關心をもつて來た拙い横好きに過ぎない。故小野島君の靈に薦するものとしても、甚だ菲薄ではあるが、在りし日の君が、宗教的な梵文學の繙譯を、連りに本誌上に發表されたことを回想して、この小篇が全然縁なき佛でもないと考えたからである。

昭和十三年十一月末の事であつた。旅行先なる長崎の某古本店で求め得た數冊の中に、基督教關係の寫本が二三あつたが、その内ローマ字書きの和譯祈禱書と共に、片假名書きの馬太傳だけは一見珍稀なものに感じられた。この馬太傳はいふまでもなく和譯のものであるが、それが片假名書きであり、又生硬な日本語である點が、頗るギョツラフ（以下G氏と呼ぶ）の約翰傳を聯想させるものがあり、而もG氏のそれとは譯方の相當異なるものであることは、一讀何人にも氣附く所である。

本はその装幀が全く洋装であつて、縦八・六寸横五・三寸、厚さ約一寸のものである。表紙は總革製の相當凝つたもので、別に文字はないが、簡單ながら背の模様といひ表の金線などといひ、どう見ても日本仕立のものではない。中は厚目の洋紙を本綴ちにしてあるが、その内馬太傳本文一四八頁別に識語が一頁あり、次に約翰傳の一部分が二一頁あり、殘餘の空白紙が七二頁ある。馬太傳は完結したものであるが、約翰傳は書きさしであつて、僅かに五章の九節までしかない。用紙は縦七・四寸、横四・七寸の面に、鉛筆を以て天地に二横線を劃し、縦線八本を格子型に引いてあり、その縦線の上に本文を書いてある——罫線の間には書かない——所は、やはり西洋手法と見るべきものである。文字は和墨毛筆を用ゐたもので、標題並に章節の漢字である以外は、片假名で書かれてあつて、極めて稀に漢字に書いた所もあるが、それらはすべて振假名をつけてあるのが普通である。この本が原本からの移寫であらうことは言ふまでもないが、假名・漢字の筆法に何處となく日本人の手でない點が見え、特に漢字には日本人の冒しさうもない缺點が少からず見える。已述の装幀とこれら書方とを合せ考へた時、この本はどうしても日本に來てゐた歐米の傳道者などが、自ら寫し取つて所持してゐたものやうに考へなくてはならない。書寫年代は明かでないが、本の古さから見ても維新以前のものであるのが妥當であらう。

## 二

茲に本文の一般體裁を知る爲に、卷首・卷末の部分に加へて一二の短かい文例を挿み、その標本を掲げることとする。原文は些の分別もない續け書きであり、無論句讀點も打つてないが、今は讀易い便を計つて、私に適宜な分ち書

きを取つた。尙第一章の例に見る如く、本文にはすべて節の數字を附けてあることは勿論、固有名詞には傍線を施してあるが、版組の煩はしさを慮つて、以下の例には之を省いた。

馬太之福音傳（この下に「サンマテウス ノ エワンセリヨ」といふペン書きがあるが他筆の後入である。）

第一章

一節

ソレ デビイデ アルイワ アブラハムタウヨリ ジイサアスキリストスマデノ センゾタウヲ ツラクワ  
 ンズル ツタエキタル コノ センゾツケナリ アブラハムワ イサカヲ ウミケル イサカヲ エコバヲ ウ  
 ミケル エコバヲ ユダナラビニ キヤウダイラヲ ウマセケル ユダワ タマルニ フワリズ サラタウヲ  
 ウマセケル フワリスワ ヘズランヲ ウマセケル ヘズランヲ ラアムヲ ウマセケル ラアムヲ アミナダ  
 プヲ ウマセケル アミナダプヲ ナアシヤンヲ ウマセケル ナアシヤンヲ サルマンヲ ウマセケル ……

第五章（三節—十二節）

配落

……ヒンナ コ、ロノ ヒトム、ワ (メデタクアリ) コレ、ソノ ヒトワ、テンノクニヲ モトメラルナリ  
 ナゲキカナシム ヒトム、ワ メデタクアリ コレ ツノヒトワ アンダクヲ モトメラル ヤワラカナ ヒト  
 ワ メデタクアリ コレ コノヒトワ 地ノ業ヲ ユヅラル ハナハダ 義ニ シタガウ コトヲ ヒモジイ

カワキ アル ヒトワ メデタクアリ コレ ソノ ヒトワ 萬服<sup>マンボク</sup> アリ アワレミヲ カケル コ、ロノ ヒ  
 トワ (メデタクアリ コレ ソノ ヒトワ) アワレミヲ タシカニ モトメル コ、ロ キレイナ ヒトワ  
 メデタクアリ コレ ソノ ヒトワ テンノ ツカサヲ ノチニ ミレル ワボクヲ サセル ヒトワ メデタ  
 クアリ コレ ソノ ヒトワ テンノ ゴシソクト ナヲツケラレル ギニ シタガツテ ナンヲ ウケル ヒ  
 トワ メレタクアリ コレ ソノ ヒトワ テンノクニヲ モトメラル ヒトハ、ナンデラヲ アクゴウゾウ  
 ゴンスル マタ ワレガ コトニ ツイテ ナニ、ヨラズ ワルキコト ウソデ ソシラレテモ メデタクア  
 リ ヨツテ オドツテ ヨロコバレヨ ソウ イタサルナラバ テンノクニ、ナンジラノ ハウビ ハナハダ  
 タントアリ ナンジラヨリ ムカシ 聖神<sup>ホウジン</sup> サノトヲリニ ナンヲ ウケナサレケル ……

## 第六章(九節——十三節)

……テンニ ゴザル ワタクシドモノ チ、アナタノ オンナヲ ホメル アナタノ クニガ マイル アナ  
 タノ オンム子ニ 地デシタガフ トヲリニ テンデモ シタガフ コンニチノ シヨクモツヲ オンアタエ  
 クダサレ ワタクシ ベツノ ヒトノ シヤクセンヲ ユルシケル トヲリニ アナタ ワタクシノ シヤクセ  
 ンヲ ユルシテ クダサレ ワタクシニ アダノ コトヲ サシテ クダサルナ、ソウジテ アクジヲ イタソ  
 ウト イタシマス トキワ ワタクシドモヲ タスケテ クダサレ カノクニ、カノイセイ カノエイダワトウ  
 アナタニ アランカギリ アルナリ エムエム ……

第二拾八章（十八節—二十節）

……ソレヨリ ジイサアス チカヨリナサレテ ヒトノニ モウシナサルニ テンチノ イセイヲ ワレニ  
 アタエナサレケル ソレユエ ナンジラ シヨホウニ マイツテ バンミンヲ ヒキイレラレヨ ソウジデ チ  
 、オヤ ナラビニ ムスコ ナラビニ 聖神<sup>ヒイビ</sup>タウノ オンナヲ モツテ コリヲ トラセラルベシ ワレ ナン  
 ジラニ オシエケル コトヲ ヒトノニ ミナ オシエラルナラバ ソノ コトバノ トヲリニ ミナ シタ  
 ガフ マタ ミヨ ワレ ナンジラ トモニ イツデモ シヤバノ オワリマデ オルト ギヨイアリケルナリ  
 ミギノコト ミナ マコトナリ ○

以上の文例について見ると、多少の誤譯と思はれるものもあり、如何はしい言回はしがないでもないが、これをG  
 氏譯の約翰傳に比するるとき、行文の習熟した程合といひ、従つて達意である度合に於て、遙かに數歩を抜いたもので  
 ある。

三

さて本文が終つた次に奥附一葉があつて、その表に左の如き識語がある。

馬太福音傳於

道光三拾年正月吉日

是譯於

この内二つの「於」の字は「終」の字の誤であり、その上「道」の字や「原」の字なども實は一畫缺けた字形になつてゐる。これらは原本に已に誤つてゐたものもあらうが、その誤り方がやはり日本人の手でないらしく感ぜられる。第一行の「馬太福音傳終」は本文の尾に附くものであることは勿論、恐らく漢譯本に倣つたものであらう。第二行は「道光三十年正月吉日是ヲ譯シ終ル」で、第三行はその耶蘇紀年と譯者自身の署名である。第四行より五行に亘つては原田庄藏の生國並に職業を附記したものである。

抑々道光三十年即ち西曆一八五〇年は我が嘉永三年であつて、日本の外交關係の上から見ると、恰もかのモリソン號事變あつて後十三年、ペリー提督來航の三年前に當るが、殊に聖書と譯史の上から見れば、最初の邦譯本たるG氏約翰傳あつて後同じく十三年、ペテルハイム（以下B氏と呼ぶ）の琉球譯略加傳等の成つた一兩年前に當るのである。かくてこの本は道光の年號を以て支那に於て出來たことは、G氏本のそれと同じであるは勿論、G氏本に次いで出來、B氏本に先だつたものであつて、傳ふる所のウイヤムズ（以下W氏と呼ぶ）譯本との關係が、少くもその成つた場處と年代とに於て、而もそれが馬太傳であること等に於て、力強く結びつけられるものがある。

次に原田庄藏は日本漂流民の名である。抑々天保八年米艦モリソン號の來航したのは、當時支那に在つた日本漂流民七名——一八三一年（天保二）遭難して北米オレゴン州に漂着した尾張の岩吉外二名と、一八三四年（天保五）に

颱風の爲北呂宋に吹流された肥後の船頭庄藏外三名——を本國に引渡すのが、一目的であつたのであるが、幕府の拒絶に遇つて遂にその目的を達せず、彼等漂流水夫等も上陸の好機を逸して空しく又支那に歸航し、生をかの地に終へたのであるが、庄藏もその中の一人であつた。モリソン號來航の顛末は、當時同號に乗組んでゐた米國支那駐在外交官たるW氏の琉球渡航記・日本渡航記（チャイニーズ・レボジトリ所載）に詳しいのであるが、右漂流民七名の事も相當委しく記されてあつて、彼等が當時艦上に行を共にしたG氏・W氏と少かず交渉のあつたことは勿論、後に兩氏に保護されて、聖書翻譯の輔佐として活躍したことは周知知られてゐる所である。こゝの識語の署名「原田庄藏」は、モリソン艦上の庄藏に相違なく、W氏の渡航記に Sansau 譯名「Heart」と記され、當時二十八歳の船長であつて、肥後領川尻の産としてあるものである。庄藏もこの奥書の嘉永三年には已に四十一歳になつてゐたのであるが、彼の生地は川尻としてあるのも、W氏の記載と相合ふものであつて、殊に「原田」といふ姓も知れてゐるし、生地の一層詳細に知られるのも興味あることである。今熊本縣川尻町には、「茶屋庄藏」（茶屋は茶商の義）として、彼に關する傳説が存してゐる（熊本師範學校教授瀨古確君の報告による）。言傳へに多少の差異はあるにしても、その遭難漂流をはじめ、遂に歸國出來なかつたこと等、ほゞ同一の事實が物語られ、尙唐船に托して故郷に送つた書信なども遺つてゐるさうである。それはともかくW氏の渡航記には到る處これら漂流民の名が表れるのであつて、とりわけ庄藏は尾張の岩吉と共に、艦と日本人との交渉上に於て、最も活躍してゐるものであり、特に彼には大隅國佐多浦に寄附した際、父親あての手紙を一土民に托して、その手交を約したといふ記事が見える。彼は水夫仲間として相當な頭腦の持主でもあり、亦或程度の文字知識の所有者でもあつたと考へてよいやうである。

さてこの奥附の文面では、この本を庄藏の手で譯したといふ義に取られるのであるが、元來聖書翻譯などの仕事は、原據たる英譯・漢譯等に精通した或人の存在を先行としなければ不可能であることは勿論、むしろG氏譯と同じやうに、歐米の或傳道者によつて企てられた事業であると認めなくてはならない。只日本語を以ての表現、日本字を以ての記載といふ、言はば最後の書上げが庄藏の手に成つたと見るべきではなからうか。尙漂流民は他にも數名あつたことであるから、それらの内の或者が亦この仕事に多少なり關與したらうことも認めなくてはならないであらう。

聖書和譯の祖をなしたG氏は一八五一年に香港に歿するのであるが、それと前後してW氏が同じ事業を思ひ立つと共に、その印刷所が二名の日本人を使つたといふことは確乎たる事實であり、加ふるに創世記と共に馬太傳の出來たといふことも亦根據ある世傳である以上、自分がこの本の作者に擬した或傳道者をW氏であるとし、それに使用された日本人の一人を庄藏であると見ることは、兩々相應じて可能性の濃いことを思ふ。この譯本がG氏本の後に出來てゐながら、或點に於てG氏を繼承した跡が著しく、而もその譯方が大いにG氏と異なるもののある所から見て、G氏ならぬ他の人によつて成つたとしなくてはならないし、この本の次ぎに書込まれたG氏譯約翰傳の一部が、中の語彙をこの譯本のそれらに書改められてゐるのなどを合せ考へる時、G氏と關係の深かつたW氏を以てその譯者と認めることは、最も妥當であると考へる。世傳によると、W氏譯本は英譯聖書における *but* をすべて「但し」と譯したので「但し様」の異名を得たといふ。(豊田博士の「基督敎聖書和譯の歴史」日本英學史の研究所載に據る)元來この *but* の譯は、已にG氏本に基源するのであつて、G氏本はすべて一様に *タマシワ* と譯してゐるが、この本はこれを一様に *タマシ* と改めてゐる。但しこの本に表れてゐる *タマシ* がすべて英譯本の *but* に當ると必ずしも言へないし、英譯本の *but* が

一つ残らず、タビシと譯されてあるとも嚴密には言へない。只この本に表れてゐるタビシの十中八九までは、英譯本のタビシの位置に使用されてゐる事實も顯著であつて、亦その世傳をこの本が肯定し得るものである。

W氏和譯の創世記及び馬太傳は、遂に出版の運びに至らず、横濱なるヘボン・ブラオン兩博士の許に送られてあつたのを、一八六七年（慶應三）失火の際、可惜灰燼に歸したといふことになつてゐる。原本の失はれた今日、他に確證すべき材料はないのであるが、如上の諸點から見たこの本は、たしかにW氏原本の焼失以前に於ける一寫本であつたとして、多分誤はなからうと愚考するのである。よつて以下この本をW氏譯本と呼ぶことにする。

#### 四

茲にこの譯本に於ける用字・文體をはじめ、語彙・語法等の譯方一般について、その概要を述べることにする。

第一に用字であるが、それは片假名書きであつて、稀に漢字を交へることもあるが、それには多く附訓してあることは已述の如くである。假名遣は不羈自由であつて無論歴史的假名遣などに隨つてはゐない。大體表音的のそれに歴史的の名残を混じたものといふべきであらう。而してこの本の假名用法の癖ともいふべきは、エ・ヰの字體を殆ど用ゐず、エ・イ専用であることである。尙アロー（アラウ）・オーライ（往來）などのやうに、長音符<sup>ー</sup>を用ゐてゐるのは、極めて稀ではあるが、字體上注意すべき一つである。さて助詞ハ・ヘはワ・エを書き、ヲは<sup>レ</sup>を保つてゐる如きは徹底してゐるものであり、「言ふ」をユウと書くかと思へば、イフとも書くなどが、表音的と歴史的との混用であつて、やはりハ行轉呼の用法はいつの時代にも名残を止め勝ちな一つである。

次に發音上注意すべきは、クワ拗音を明記してあることであつて、南九州の方音の表れであるが、クワンズル（觀）・クワシ（菓子）・エイグワ（榮華）・クワイタイ（懷胎）・ゲンクワ（玄關）などの如く、一つも誤ることなく徹底してゐる。尙ムマレ（生）などのムの用法（唇音に先だつウの發音）なども保たれてゐるのであるが、これも多分九州に存した方音であらう。

音の長短は俗語の間には亂れがちのものであり、又表記に於ても同様であるが、この本に見える著しい點は、拗長音を拗短音に表記したものの多いことである。ニヨボ（女房）・ジヨカ（城下）・リヨ（漁）・ビヨキ（病氣）・シユトメ（姑）・チユブ（中風）などが是であるが、これは亦一方にセイジヨウ（聖城）・ビヤウニン（病人）などの表記もあるのを見ると、それらが短音であつたのではなく、只表記法の不完全から來たのであつて、彼等は拗音として二字に書くことが已に長音であるやうに考へてゐたからである。又促音となるべき「一杯」をイチパイ、「一本」をイチボンなど書いた處もあるが、一方にイツパイと書いた處もあり、已に下がパイ・ボンとなつてゐる以上、そのチは促音でなくてはならない。イチテン（一點）・イチトキ（一時）なども同様に見るべきものである。これは「一」字の原音に還元して考へた書き方であつて、俗衆には亦かゝることがありがちである。

第二に文體であるが、G氏譯が口語體であつたのに比しW氏譯は文語體に書かうとしたのである。即ち文末に於て物語文慣用語のケル（終止形ケリは表れてゐない）を用ゐ、又指定助動詞ナリ、存在動詞の終止形アリ、又は命令助動詞ベシを用ゐてある如きが、これを證明してゐる。しかし前掲の文例にも見られるやうに、語彙から見ても語法から見ても、全體として口語基調であることは争はれない。語彙が舊幕時代の民間語であつたことは勿論であるが、ま

して語法に至つては、文語・口語の區別をなし得た程度の文でないことは、固よりのことである。時に文語風に氣取つて見ても、それが却つて眞の文語になり得ず、概して文語と思つてゐてもいつか口語に引かれてゐるものが多い。一例を活用言の活用に取るが、二段活用の連體形を終止形にして、ハラダ、ルユエ・アンジラルニ・トコロガヘラルトキなどいふのは、文語風に氣取つて見たが却つて破格したものである。サ行變格を四段化してホツサヌ（欲セヌ）・シスマデ（死スルマデ）などいふのも同類である。總じて動詞の二段活用に、九州風な古形がなく、オシエル・ヒラケル・シンゼル・オサメル・ハラダ、セル・コロサレルなどのやうに、殆ど東國風の一段形になつてゐることは、G譯本の踏襲又は東國水夫の口に影響されたやうに考へられるが、この點は口語化の感を一層強くするものである。終に今一つ附記したいのは、「候フ」言葉の二三混つてゐることである。

ハナハダ アリガタク ゾンジソロ

アカタノ オンデシノ メニカケソウラエドモ

これらもこの文體が如何に雜駁なものであるかを知るに十分である。

要するにこの本の文體は、文語に書かうとして書き貫き得ず、到る處口語に墮したものであつて、當時の普通文に於ける教養を缺いた民衆の俗文ともいふべきものである。しかしさうした俗文が、却つて水夫程度の實際生活に即してゐて、洵に醇である點に興味を覺えるのも亦こゝに存するのである。

語彙の譯方については種々の方面から觀られるが、ともかくG氏譯本があつて手本となつたことは見逃されぬか  
ら、試みにG氏のそれと比較した語彙若干を摘出して見よう。先づG氏を繼承したと見るべきものに次のやうなものが  
ある。

キヤウモンノホン(聖書) タマシン(靈) ハツド(律法) イキカヘル(復生) モンビ(安息日) クンゼイ(衆)  
ツウゲ(黙示) コリヲトラセル(洗禮) ダンギヲカタル(證) ヘントコタエル(答曰) ゾンズル(信仰)  
右の内ハツドはG本ではハツトとなつてゐる。G氏のタマシヲをタマシと改めたなども半ば踏襲した譯である。しか  
し兩者異なる譯語が相當に多い。左に目立つ語の若干を取つて對照表をつくる。

漢 譯

G

本

W

本

神

ゴクラク

テンノツカサ

聖 靈

カミ又はシン

ヒイ  
神

主

カシラヒト

キ ミ

祭 司

シントシヤ

シユツケ

祭 司 長

タカイクダ

オシヨガシラ

預 言 者

マエカラシツテオルヒト

セイジン

祈 禱

タノム

オガム

餅

モ チ

クワシ

十字架

ハリツケノキ

ハタモノギ又はハタギ

踰越祭

パスカゴセク

コエルマツリ

耶蘇

エズスク

ジイサアス

基督

クレストシ

キリストス

馬利亞

マリヤ

メレ

約翰

ヨハンニス

ヨハニス

猶太

ユダヤ

ユヂヤ

耶路撒冷

イルサレム

ヂユサレム

固有名詞の發音が多く異なつてゐることは、前掲の卷首の文例でも知られる。因みに「馬太」の訓みは一個處だけに見えるが、マト（マタイではない）と言つたらしい。或漢譯に「馬壇」或は「瑪竇」といふ字の充てられてゐる發音が之に近いのである。「主」を原語で呼ぶに、G本はメシヤスといひ、W本はミサヤといつて發音が全く違つてゐる。さて譯語の中には、「棘菟」をG本はアザミノカブトとし、W本はアザミノカンムリとする如きもあつて、上半は踏襲、下半は改譯したものである。尙この本には譯のまだ固定しない語があつて、「主」の如きはキミとしたのが最も多いが、時にはセンセイといひ、シ、ヤウといひ又はオホシユジンなどもいひ、時には原語でエホウワなども言つてゐる。「福音」は字音でフクオン（フクインではない）と訓み、譯してはヨロフプロトバ・メダタクヨロコブ・コト・メダタイ理など様々に言ひ、更にG本約翰傳の標題にタヨリヨロコビとあるのを、この本ではツタエヨロコブ

など改めてある。「審判」といふ語は、G本にはセイバイといふ名詞、非マシメルといふ動詞の二譯あるが、この本は動詞形のみにして、サムライヒトヲトル・サムライヨリアラタメラル又はアラタメル・ワキマヘルなどいひ、世界の審判にはムセルといふ語を用ゐてある。これらは固定した適譯の得られなかつた例である。

翻つて全篇に亘つて見ると、概して碎けた單語・成語が用ゐてあつて、言はば民衆的に熟し切つたそれらを、臆面もなくさらけ出した所に、却つてシツクリと來る適譯があつて、三嘆に値ひするものさへある。又さうした方が民衆教化の宗敎書としても、數層効果的であるやうに感ぜられるのである。

ワレヨリ イセイアリ ワレ ソノヒトノ ソウリモ トレヌ

ミチノデ カイヲ フイテ シラセラルナ

テンノツカサト ダイコクデンニワ タシカニ ツトメラレヌナリ

ワシ チヤラメラヲ フイテモ オマエタチ オドラヌ

ヨハネスノ クビヲ サンボウニ ノセテ ワタクシニ クダサレ

アマガシタワ ミナ ジ、ンノ モノニ セルホドノ チヤウジヤデモ イノチヲ ウシナイテ ナニノ エキ

ガ アルカ

シカルニ ダンナ アワレミヲ カケテ カノ シヤクセンヲ ミナ マケテ チヤウメンヲ ケスユエ マイ

ラレヨト ギヨイアリ

ユデヤノ タミノ テンカサマ マンザイデ メデタク ゴザイマス

コンバン ニワトリ マダ ウタハヌ マエミ

ドノヒトデモ カタナヲ モチイル ヒトワ カタナノ ハクソニ ナル

などの文句を讀んで見ると、たとひ言回しに流滑さを缺いてゐるとしても、用語が眞に日本民衆そのものに即して躍るのを覺え、如何にもと微笑を禁じ得ないものさへある。

因みに、附記の約翰傳はG氏譯のそれを移寫したものであるが、只その語彙の或物がW氏所用のそれに改められてゐる。ゴクラクをテンノツカサに、カミサマをテンシに、エズ、クをジイサアスに、オナゴをオンナに、クヒモノをタバモノに、トコをトコロに、メケタをミツケタに、タマシワをタマシに入替へた如きに過ぎない。これはW氏がG氏譯約翰傳を、自分の馬太傳に準じて改譯しようと企てたのだとも見られるものであるが、しかし之は前述の如く卷首の極めて小部分であつて、さうした想像は餘り出過ぎたことになるであらう。

## 六

次にこの譯本が、英譯本と共に、漢譯本を臺本の一つ、むしろ第一臺本としたことは、言ふまでもないことである。文字上から見た漢譯本は、他の何本よりも日本語への關係が近密であるからである。それ故この本も、字音の術語の多くをそのまま漢譯本から借入れたことは、例を擧げるにも及ぶまいが、時には日本語にしにくい語を、漢譯本についてその漢字を借り、それを音讀して之に代へてゐる場合もある。

ナンジヲ イノラルナラバ ソノ ヒトニ シユグサセラレヨ (詛爾者祝之)

ギニ シタガツテ ナンヲ ウケル ヒトワ (爲義而遭迫害)

義アル ヒトワ マチカヌ (非招義人)

ニンゲンノ マエデ ワレヲ 認ズル ヒトワ (認我於人前者)

智 ナラビニ サヤウノ フシギノ コト デキル 能ソ (此智慧與此異能)

右の例を見ると、漢譯本について譯したことが甚だ明瞭であつて、中には文字を逐うて直譯したと思はれる所さへもあるのである。熟語の和譯にしても、「群家」をムレプタ、「汚鬼」をクサレオニ又はケガレオニなどいひ、碎けてはゐるが「丁税」をアタマガ、リなどいつてあるのも、漢譯本の漢字に即いた確證である。

漢文直譯について今一つ顯著な點は、「欲」字に即いたホツス、「則」字についたスナハチ「或」字についたアルイワなどを用ゐてゐることである。

ヒトヨリ カヤウニ アイシラワレタイト ホツスナラバ (所欲人施諸爾者)

ワレ アワレミヲ ホツス タマシ ソナヘモノハ コノマヌ (我欲矜恤而不欲祭祀)

マタ 子ガフナラバ、スナハチ クダサル タズチルナラバ スナハチ ミツケダス モンヲ タ、クナラバ

スナハチ ヒラク (求則予爾尋則遇之叩門爲爾啓之)

ミガ 百バイ アルイワ 六十バイ アルイワ 三十バエ ミノル フェル (結實或百倍或六十倍或三十倍)

これらを見ると、この翻譯には漢文和讀の出来るものが參加してゐたと見なくてはならないが、それは果して何人であつたか疑問である。

こゝに附記したい一つは、第二十一章にある「橄欖山」をこの本が「タンバトイフヤマ」と譯してゐることである。(但し後には漢字で「橄欖山」と書いてもあるのに) タンバといふ名は英譯にも漢譯にも見えぬ所であつて、或は原語にでもさうした語があるのかと搜索した結果、タンバはやはり支那語であることがわかつて驚いたのである。字書によると野生の橄欖を「膽八樹」といふさうである。これは支那語に再譯したとも見るべきものであつて、他に類例の少いものであらう。

次に漢譯本には皆漢語譯されてゐる語であつて、稀には宗教界に慣用されてゐる原語を以て、それに代用してある場合がある。これらは彼等漂流民の口にも言ひならされてゐたらうことが想像されて、殊に興味深いものである。

エホウワ(主爾之神) フワラキデン(佩經) ミサヤ(基督救世主の義)

などが是である。アメン(亞孟)も、卷末には「ミギノ コトミナ マコトナリ」と譯されてゐるが、第六章の主禱文には「エムエム」と音のまゝ出してある。これらの假名書きも亦彼等の摸倣音で記したものであらうが、中には却つて英語の發音に近いものなどがあつて面白い。尙こゝに珍しい一つの例は、英譯本にも漢譯本にも音寫されてゐる固有名詞であつて、この譯本が漢語譯してゐるそれである。デカポリス(英譯 Decapolis 漢譯低加波利)を「拾城」としてあるのが是である。又サタン(Satan 撒但)といふ語は、英譯にも漢譯にも固有名詞として原語のまゝであるのに、この本はわざ／＼譯してテキキ又はアクガタキといふ國語にしてある。これらは無論W氏自身の手細工が入つてゐるであらう。

終に語彙の時代色から観ると、言ふまでもなく舊幕末期のそれであつて、政治機構から來る

テンカサマ(王)      ミダイ(女王)      ブギヤウ(方伯)      サムライ(審判人)      ケライ(僕又は従者)

オホジョヤ(收丁稅者)      ゲニン(至微)      ダイミヤウ(大人)      トノサマ(人君)

などの階級名から、ジヤウノウ・ウンジヤウ・アタマガ、リ・ネング・銀イチマイ・ギンスイテモンメ・キンチャクなどの民衆經濟上の通用語、又はアケムツ・イツ、ハン・マツビル・ヤツハン・ナ、ツハンなどいふ時間の呼び方まで、皆一世紀前のものである。

尙宗教上の用語に於ても、日本在來の神道のそれや、殊に根強い佛教の常用語が、皆新しいこの宗教の術語に襲用されてゐることも、學者の作つた現代の教會語などに比して注意してよいことである。テンチカイビヤクノトキ(元始)・アマクダリ(降臨)・ハイデン(神座)・ダイコクテン(財貨)・ハイライタス(拜之)などは神道起源と言つてもよく、デゴク(地獄又は陰府)・ゴクラク(天又は永生)・シヤバ(世)・ミライ(死)・テラ(會堂)・シユツケ(祭司)・オシヨガシラ(祭司長)・キヤウモンノホン(聖書)などは民衆に根強い佛教用語からである。

茲に自分がかねてから懐いてゐた一疑問について述べたいのであるが、それはG氏譯本に於ても亦この譯本に於ても、英譯 God に對してカミといふ語の用ゐられなかつたことである。直接英譯に向つたならばともかくも、漢譯本には已に「神」字を以て之に當てられたことであるから、之を主なる臺本とした日本人には、自然カミといふ語に導かるべきなのに、G本が之をゴクラクとし、W本がテンノツカサと言つてゐるのは抑々何故であらうか。これに就いて自分は種々私考を試みた結果、次のやうな一案に達したのである。曰はく、これら初期の邦譯本が漢譯本に依據したことは否定し得ないが、その用ゐた臺本が、我が國に流布した漢譯本とは異なるものであつたからだといふのに在

る。

自分は漢譯本の種類について、まだ十分の知識をもつてゐないのであるが、維新前後に我が國に流布して、夙に訓點附きの本ともなり、通行和譯本の臺本ともなつた漢譯本は、恰も漢譯本の代表の如く最も廣く行はれたもののやうに思ふ。しかし漢譯本には他に二三の異譯本があるのであつて、今この場合に必要は一異本を姑らく家藏の架中から引出すことを許していただきたい。私の本は一八五九年（咸豐九）の上海墨海書館の印本で、舊新約全部四冊のものである。この本が何時出來て、何時初めて上版されたかを知らないが、凡そその譯文の簡潔なる點に於て流布本とは大分異なるのみならず、その語彙に於ても亦異なるものがある。今その目立つた數語をあげて、流布本のそれらと對照し、併せてG本・W本の譯語と比較することにする。

英 譯	God	Spirit	Holy Ghost	Prophet	Scripture
異 本	上 帝	神	聖 神	先 知	經 又は 記
流布本	神	靈	聖 靈	預 言 者	聖 書
G 氏 譯	ゴクラク	カミ又はシン	カ	ミ	マエカラシ ツテオルヒト
W 氏 譯	テンノツカサ	セイジン	セイジン	セイジン 又はカジン	キヨモンノホン キヤウモンノホン

この内スピリット並にホリゴーストに對するW氏譯のセイジンは聖神であり、プロフェットに對するセイジンは聖人であるが、カジンとあるのはその漢字が不明である。

さて異本に於ては「神」字はゴツドではなくスピリットの義に用ゐてある。従つて流布本の「神之靈」の場合は、異本では「上帝之神」と譯してあつて、「神」字の用法が全くちごである。そこでG氏の譯語を二つの漢譯本の用字に比較して見ると、ゴクラクはともかくとして、カミはやはり流布本よりも異本の「神」若しくは「聖神」のそれに關係が深い。マエカラシツテオルヒトが「先知」の譯、キヨモンノホンが亦「經」の譯だらうことは想像に難くない。更にW氏の譯語について見る時、テンノツカサといふ語が、流布本の「神」よりも異本の「上帝」について見たる方が自然であり、「聖神」といふ語を異本そのままに採用してゐること、プロフエツトをセイジン（聖人）としたことは「先知」・「預言者」の何れの用字にも關係づけにくいとしても、キヤウモンノホンはG氏譯と同一であつて、やはり異本起源といはなくてはならない。かく見て來ると、G氏・W氏ともに、臺本とした漢譯本は異本若しくはそれに似た本にあつたと言はなくてはならない。元來「神」字をカミと譯することは、否でも日本人には引かれるのが自然である。これはG氏が已にスピリットの「神」字をカミと譯したらしいのでも知れる。殊に「神」の字音でシンとも言つたことなどは愈々その事を強く立證するものである。要するにG氏・W氏がゴツドをカミと譯し得なかつたことは、臺本とした漢譯本が今の流布本ではなくて、流布本よりも古い譯と見られる異本であつたことに起因してゐると思ふ。之に反して通行和譯本が「神」・「靈」などいひ、「聖靈」・「預言者」・「聖書」などを用ゐてゐるのは、皆流布漢譯本からそのまゝ取つて來たものである。

この本の用語には、多くの俗語が表れてゐるが、それらには又方言的特徴を可なり色濃く見せてゐるものがある。それ故一往之を地方的に考察することは、庄藏が九州の水夫であつたといふ點からも、閉却し得ないものであらう。方言的特徴の第一は音韻に於て表れてゐる。先づ前述のクワ拗音の存在することである。これが正しくカと區別されてゐるのを見ると、確かに南九州の方音と見てよい。次はラ行・ダ行の混淆である。

アンダク(安樂)      クダ(倉)      グワンダイ(元來)      ヘデエデ(ヘレーデ)

メレクク(めでたく)      ヒラリ(左)      ランジキ(斷食)      カダラ(からだ)

など、この錯誤は相當に多い。これは必ずしも九州のみと限らないが、九州方音にも存する著しい點である。

母音の移動した訛りも可なり見える。

アヲナキテ      スブ      オムク      マムラレヨ      カモイナサルナ      ソ、ヤク      ツボヤキテ      ヒトツボ

オホカメ

イゴク      エザリ      サイモ      ツウエ      バエ(倍)

右は傍記した小字が正しいものである。これらも必ずしも九州のもののみではないが、大半は九州音と見て妨げないであらう。

更に音の清濁について九州らしいものがある。サウシテをソウジテといひ、ヒキヌイテをビキヌイデといふ如きである。ハツト(法度)はこの本で皆ハツドと濁つてゐるが、元來國語の促音は清音の前には存するが、濁音に先だつことの出来ないのが特性であるのに、南九州には濁音前の促音が地方的に可能になつてゐる。安息日はモンビといふ

のが普通であるのに、反つてモンビと清んで言ふのもセンペイをセンペイといふやうに恐らく九州人の癖であらう。

次に連聲的變化即ち同化音であるが、ワと發音する助詞ハが撥音シの影響でナとなる例が見える。

ジ、ンナ。 ミエヌケレドモ…… シヤクセンナ。 ミナ マケテ ヤリケルナリ

サンヨウ(算用)をサンニヤウとしたのも見え、又一種の子音同化であるが、「生マレル」といふ語に限つてムマレルとムに書かれてゐるのは、多分さう發音したらしく、これも九州に残つてゐたものではなからうか。

只ジ・ヂ・ズ・ヅの區別が、この本の假名表記に於て全然混亂してゐるのは、九州風でない點である。これは確かにこの翻譯に他地方の口が入つてゐることを思はせる一つである。しかし之を概観して音韻の點に於ては、九州的特性が可なり強度に表れてゐると言つてよい。

語彙については、前述の音韻變化の中のものも無論之に入り得るものであるが、その他に於て自分に耳遠いもの若干を擧げる。暮をイケ又はボタク、籠をメゴ、僞善者をマヤモノ、荊をゲズノキ、郷里をテナガといひ、號泣をイキズ、リと譯してある如きは方言らしい。箕をミイと長めるのは確かに肥後地方の習癖と聞いてゐる。十字架をハタモノギ又はハタギといひ、果物の收穫をオンマイなどいふのは、ちよつとその意味が解しにくい。衣物をキリモノといひ、サリジヨウといふべき離縁狀をサルジヨウなどいふのも地方的の訛りであり、狼をオホカメといふのは、文祿舊譯の伊曾保物語にも見えてゐるが、多分九州でもさう言つたであらう。

動詞に於ては、罪を悔改めるにトメル、廢る義にムセル、收穫する事をシノウスルなどいふのは方言らしく、カテルを兼持つことにいふのも九州に行はれてゐる。屠るにリヨウルといふのは料理を活用させたものであるが、この語

だけは東國のものやうに思はれる。その他

アナタ ノ オボシメシニナシテ クダサレ

カンラント イフ ヤマニサイテ マイリナサレケル

ソノ カラシナワ ミナ クサヨリ オホキウシテ キニ ナリケル

などのナシテ・サイテ・シテはたしかに九州人の口であり、形容詞シク活の連用・連體の語尾を呑んで、アタラシ

(イ) モノ アタラシ(ウ) ノムなどいふのも亦西國のものであらう。

終に語法であるが、已述の如く二段活用的一段化が強くて、オツル・ラシユル・タスクル・カ・スル・コロサル、といふやうな形が全然見えないのは、純粹な東國風であつて九州の特色が全く失はれてゐる。只動詞の四段化傾向は相當強く表れてゐて、例の二段活用語の連體形に終止形を用ゐるのも、その傾向の表れであるが、サ行變格の「欲スル」「死スル」をホツサヌとかホツスカとかシスマデとかいひ、二段活の語のマカセテをマカシテ、アツメサセテをアツメサシテなどいふのも是であつて、皆西國風である。但しサ行變格語のスルをシルといふこと、即ちゾンジル(信する)・シヨジル(生ずる)などいふのは東國風であり、又スルをセルといふこと、即ちカルクセル・カウカウラセル・シンゼル・化セルなどいふのも東國の一地方形であらう。これらはG氏譯にも已に出てゐるのであつて、確かにそれに倣つたらしいのである。

形容詞に於ける著しい九州特徴であるヨカ・ワルカなどいふカ活用形は殆ど見えない。只一個處、「オホカトオモワル」といふ語が見えるが、このカは疑問のからしく、或はオホイガの誤寫らしい疑があるから、確證にはならな

い。やはり文に書くといふ意識から、かゝる方言は避けたものであらう。形容詞の連用形ク及びハ行四段活動詞の連用形フのウ音便は、ヒクウ・タツトウ・ウツクシウ・メズラシユ、オモウテ・ネガウテ・アラウテなど相當見られるが、九州地方のヨウデ（呼んで）・ノウデ（呑んで）などいふ形は全く見えない。

以上で方言的考察の概要を終へるが、譯者の文章表現といふ意識から、力めて避けられた俗語のあつたらうことは勿論であり、G氏譯を摸倣したことや、又九州人ならぬ他の口の介入したこと等によつて、他地方の言葉の混じてゐることも認めなくてはならないのであるが、元來文筆の人でない水夫輩の書くものに、意識なしに踏みはづした地方語の入ることは避くべからざる所であつて、この點に於ては九州産たる庄藏の地言葉が相當に見られると言つてよ

## 八

自分がW氏譯本に擬したこの馬太傳は、G氏譯約翰傳と共に和譯の初期のものであり、且それが外國人の事業であり、更に中國に於ての所作であり、而も我が日本語の輔佐役が文筆教養に缺けたものであつたこと等によつて、自然事實の誤譯も生じ、表現の當を得ない所もあるとはいへ、之をG本に比較する時、語彙のより熟して來てゐること、言回しのより自然であること、従つてより達意であること等は、買つてやらなくてはならない。これもとよりW氏の努力による所が多いが、亦庄藏の輔佐が與つて大きかつたことも認むべきである。總じて行文に漂ふ稚拙さ、而もそれに漲る醇眞さには、庄藏その人が見えるのであつて、却つて愛すべく尊ぶべきものをさへ感ずるのである。傳ふる

所によると、W氏の聖書和譯を協助した日本水夫は、基督新教の信者となつた日本人の最初のものであつたと言はれてゐる。それは恐らく庄藏のことであつたであらうが、その教義に相當の理解を有する人、否心からなる信者でなく、只日本語・日本字に翻する機械的な操作だけでは、到底これ程の實は結ばれなかつたらうと思はれるのである。

(昭和二十二年二月十五日稿)

